源氏物語

光源氏一部講釋并詞

光源氏の物語乃れうるい村上天皇れいむとあ
れかさの院とゆるるとろ一條院のきさき上東院へ
仕せうれこあり春のはれはまへに行るる女院
式部といふ女房をもつて越前守なりのすけの女也いうる紙ちまいつ
ゝ（きゝ作ゝ物おいするふ式部ゆさくおちくふいる
やゝ絵ちるれて物ゝ市れ物ゝやゝ行ゝんあゝしくにゝ
出して御覧せこ所さはゝんゝ物ゝにゝさ色行へ
ふゝふゝ物ゝ作ゝゝきこ物ゝにゝそこふゝはゝゝいて
そもかくを作ゝいゝてんやゝ作ゝゝは式部ゝいゝゝ
ゝて御前といゝらゝれゝ公いゝゝよいゝゝゝいゝを

あるこの国にてさんろくして心まことにいとまり
折ふし十五夜の月ひかりみのかせをふらしてあきらか
なる秋なれば式部うち心すまやかにかくのごとく天台
六十巻にあらずしてまことに乃数六十帖にさしも歩毎に
名をつけ近代の内にもかんるすと
世にはたらくすべ乃世にてつくりたてしろ
うつり才こそ紫の歩をとなりにもせふにたるさいと
てうめちい紫式部とやうにいふ但はうるおい紫式
の中将いあり紀貫の冊侍はの四紀貫の文と
てそのちかをうひ形ゑのちきりけるやまかたはさ
ふしたるまいて光源氏の歩と名付いるる
かのなりしれうまいうの二條五條の二人を
ささえ紀ことのしくにはいるとく源氏と藤壺
乃女院二條院内侍のかみをあいきり業平伊勢所
宮と歩うとしてあるにあらず源氏と六條乃
御やすどころの所文をして伊勢へくるる新城
行まさうこれのこと情をうあ歩をもとと
おのくしまきうあるあるみのこれた
大臣なるあきれ行くいとこの津門乃水るめく
世一えんの源氏なり只あかるる人をとれ詩所管
絃をくかくるる光源氏といつる我ものちなる
小よるくしのされの上代あるる武部の名はよをも

かの方のあさ毎にいろをうつして侍りて（みるさ
し事はかりに成ぬれば）すなわちこれ物しはく
侍るまいて足せう侍りて侍るにかさ
いてきるふあ侍るいろ又さらけまく物やけるさし
ふ侍りて人の心ばつを屋まわくろくろをもおして物の
かさけをさとむ侍りて五千四百の内より世こ世れよ
きあくさうるまいをあらいて三四代のうちに君をさんを
身をあいをわる事をのやうにあるいろんくんれうち
行方のみむしきをする侍るくはしとも物よりをそをく
侍るいつるれ方ふ侍るいを春の花乃本をれこを侍る
ふるいをのうち公い秋の月を里のかまをそ人は

なるうえ（）多成をうは侍をてじ人乃いつ侍ら秋
をもてあをいたん毎うれうきも世こをう
うく人の侍るこの事に四成よりをたんよくをうを
えくく人ふをかくこう仏をてみるをい神
仏もかくく侍いこの世後乃世世つうれをを石の
くるんをん乃ゆうをやうなくこれをるにかるい
ようをいををれうい

源氏目録一

一 きりつぼ　源氏十二まきの事
二 はゝき　同十三ゟ
三 うつせみ　同十四
四 ゆふがほ　同十五
五 わかむらさき　同十六
六 すえつむはな　同十七ゟ十九ゟ
七 もみぢのが　同十八
八 はなのえん　同十九
九 あふひ　同二十
十 さかき　同廿一
十一 はなちるさと　同廿三ゟ

一 きりつぼ

桐つぼゝ大内裏平八敷のうれしなつやとけいちやとゝ
もこゝろはのかるゝとゝあり。太上天皇をゝいつれの御
門女御かゝるあまこさまひあ
まこ中に屋ん殿なれきいはあるゝとゝ称く
ゝ紫やきまゝあるゝとゝ光源氏の母なり
けかゝわきりつぼゝ住のまゝ二の巻ゝはけ人の事を
のゝはゝ紫にきるゝつゝ名をゝ太上天皇紙
も桐はかれゝゝゝとゝなる
一 見ゝゝゝとゝいまゝ　みゝゝゝ　一の人とゝ太政大臣
なりぎんゝの内ゝ人ゝ見れゝゝゝ右大臣右大ゝん

四位ほうくわんさちやうとりはからひ大しやう大納言中納言さんと
とくさんの人をはじめくきやうふとりはてん上人とい中将
おれはてう弁の君かとりつかてんの人なり
一女房さちやういきさねとい一代さ一人れはてゆをきさねさ
さちやう人い中宮とりはい女御いこのかの人なりつくらも
ゆーまたこのくるのかのはいてくらゆのうふこちら
さて四位の守せんしとのなりゆわいかるなりいつ
まも御門の御子ぬちゆみたまへい足やをれとり
なりゆ丸のいこやうぬるりゆ心ふかう稚人このの女
房の出仕とりはれ大さんれはていつなりゆ女房のさつ
いやれはこの侍いてんとなりゆ一乃ゆるいたんの

女御さちやうれてんの御子をきりつかれ巻にまりゆ
乃君とりつりいつまも世つきのみれはにおるゆいさをは
今と東宮まりけの君とりはりのうのうのうに女房二れ
ゆまた女二の文女三乃文さりはそのつうふ相つかの
更衣の御子世ゆ角ゆいりゆきさりれる玉のおりて
御子ゆまれゆいわとりん人にあるは光源氏れ四年や
ゆさいはて御子はゆあり四年のあるいゆわるる
なれ四位りまりいて大内をゆそうんと志ゆみ
をみれゆるかるれれゆるいてわるいやるみ
うはりき人のいさう御屋せくゆみまりる
ふなりゆゆとい（ばい）てくるはの乃せんゆるいてまりまる

入いさゆるしてきこしめすに世ふうさしたるわかうあん
乃ふもおくれさるくしてそ聞てせうしいるとさ
つとも打とけてい志ゆさやしとなくくの事ハ
かきりとくく釣ふみちのうれさか
いつ海わかさ　いつゆりてきた命なるもきり
うろかり　きこえ海わけなる事ハ世かくれもい
さもとをえ法ゆあ海なれらるれいゆそさをなり
ゆいぬ　みるやいゆしかてうてあくかのさをゆ
中使の行ふかもわかつなくゆりうとに衣ふ
ゆかこえそぬかとに何事もわかりさこもる
わりゆとゆふも出ふいてうと考そいそ

おりゆと　かくの母　ゆの意　月数ゆるきいせんくれ志て
わかさるいかくの世ゆかくの世ゆのもうえいて
ふ海ひるふくこひらそあくくふ風のまれる
くそはさむさ夕くれのなゆ海のよりもわかく
いけるゆゆかくて夕月衣ゆくれ行くゆの世方、
中使ゆう源氏ゆいくれくもゆ月れをも上ふ水
をいわくきいつゆうかく衣の世ふのくゆみてゆつて
ふ中ふくひいゆきいのうくゆいいくゆくれり

見やさのくゆ寝ふさむさくゆ風の音ふ　海ふれむすゆ
みやを　こくれりくゆ聞ゆいてをやき　うくくゆくこえ　きいりて衣のゆき
かくくの人れそ行くれくゆ事也海人とゆさて

うたゝねなりけるをいとけたかくきけとのたまふ

なにはがたにまうでたりける時に有あけを

けをうたがはしくいとうるさくと

ゆゝしき事のたまふ使かうぶりはてゝ

ゐもしたりけるを夜なよなよ取てゐたる花をて

うけとりて

いと清らかなる中にのぞきたる

人ゝをみて秋い来てゐる

といふこゑの聞ゆるをとりなして

うぐいすのこゑ聞えんとてうちなく

すゝしうもの恐れたる

すゝしきのかさうい侍てゐ

ものとうるさくうるさくもの

いとゝもの恐れたる

けるをとうるさく

毋小の方

毋小のこと命おきさせはきさて私のみやうとあは

いうてあるとうるさく

私のわれをうるさくうるさく

といふ事のゆゑ聞かこのあるはこのいやうに

そうして毋小のこと

あるこゝ風ふきたるものゝこゑ

こゝにうるさくなれ

小のこと

かのゝいのゝあをのてをゆゝの物ゝ使乃

おもう物をいとさしたる
みくふらんせさせ給へ
ものゝあるうらなるに
なんちうたんさ
なるほどうつくしかりしかたちをうれし
ゆかしまうしとうかけくみて云
むのあるうら
かやうの事いみじうゆゝしのるといきうり
ゝ称をおくへ枝をうらいさんと契をかはしし
ゝれもうらいさうけういのちはかそはさをはうう
ゝ知くしかりうもおもはいしろみるかの方を
ゆるつゝ忘ようれるまいて恋ゆさく侍男にたいい
をよはせさぶるいしなそ世はそ恋ゝこゝふせ
ゝぶるうい市ふ枕ゝとれいいつをてうゝ法事なるを
いせいやまれたゝ紙よみはゆさい詩をはそてうき
ゝうゝうゝやゝきいのゝうられるやうゝは色いゝ
ゝいつゝ西の物ゝうるはうゝ
はゝうゝれも筆ゝきうあるはれいふらいすれしこの
ゝうゝふのかいはゝうゝをゝうゝうゝうるいさ
ゝうゝうをもふよをふ物
はゝうゝうゝらなくゝうゝかゝけるいかゝうゝ
物をはゝうゝくれゝふゝはゝうゝくれゝ書くゝうた
しれゝむいゝ紙しはけなるそいなう色のうう
はゝは枕ゝうゝ

同じ
うちむのやミれうはしるに待さかねる
　茂よいくとも滴さらさるらう
しり大前の比より
　雲の上ともすみかねる秋の月
　いかですむらんあさちふのやと
けふやまた何かの人の女房と思ひしの
　あるまれはいかれすさみにくらき
　なくてそ人は恋しかりける
此いふは乃恋しかりけるなり
一　光源氏とは七歳にてよませしや源氏の人まうさ
中にかくれそこ人のちみのきらし給へく
六のかの家ちんかれ子乃中にはしてさうしさせ給ふ
そこ人のまうしひかるさまにていまうれうきれくね
このかりのへきそのほしますさわりはの方もくるし
くきせとらんされのへしぬしよりゆうらにそてしひとは
君し名付よせしゆへ今まてく光源氏の物語となる
七才よりはしめて給ふこゝにて源氏の人しもさそ詩経つ
くり給へるこゝにて源氏の孫までも雲井をひかしまて
この君をうちみそてまつるくはいひかるかこときも
まかうち光源氏へさきさはしまつる七才より源氏
乃姓を給ふそこ人はぬすへはし給ふ姓をさは
いりまへはみかゆく氏則源氏となり十二そはせん

一（せいりやうでんの東のひさしにてこのことあり）その夜大しんの御ひろいしてあそ御
そいふしとはさめく左大臣のむすめ源氏出させ給ふ。はた大臣
の北の方は太上天皇の御いもうとの御はらなれバなり
三年乃御子乃御ひろいのひさいは仕出大臣よりいろ宮ふうちに
引入れ大臣ハ太政大臣より武家の忌かりしおやゝ同
共や太たゆを御前めして御さうつくさせ申（御しやうそく大くらさます）
いとけすれぬんすゆひよなりし紙
（そとまきり）らきはこころいとゝひてあすや（あつひの上にす）
又ひろの后のさ御馬したりすゑて結いてさ申
（おかくし）姉そうして（御かなそえふこそそまくる）
（さん）ひそいはるかんもぬかれすゆひり

こんむしきのなしあせとれ（ちさうのかうといとせ）
はゆそいふて乃姫君ありひ乃巻にかゝれて申へ
なそあつひの上やけいあこあり

哥九首　　詞五ぞ

二 はゝ木ゝ

源氏はま中ねときこゑ御傍母后つかれかく
日の名をなほれいせんたいの女四乃宮まそたてまつる紙
まゐつかのかいろくろふかえるゆく御門いちあり光
源氏とおわすみ何かれまへいせの人かゝやく日の宮
とゝまりそのゆうちをぬと申んしいゆふみしめく
あかし来りて大との御そいぬかれ姫君をいはふにし

しらさはいとしのふのみたれまやは

引歌

春日のゝわかむらさきのすりころも

しのふのみたれかきりしられす

此は一首の心なり

一 此をよしなにあとといふ事のはまことしくうたかはしくある（此物語に見え）
よしのおもてんと申をおさく人ともおもはくやおさなく此
いふもとも物のさたありける時のふるやなく様う
こて下清源氏はなかく此物いふに内にさふらひあふ
そのはしのいあひもまいりはなりしなまうさる人あは
いひろ御物いみといふ所そひとつのひめ君御あふ此の
中からて星もせとす（なりひらの歌きん也）わかゑをしさおほく人なりこ志つよ
此の中ねといふはこれなり此中将とならるれこしの
うみし歳武のおやかし以上三人あつてそ世の中の女れ
よねおもきらうまいそのこおほ志もと三ふんなるちてさる
あくそひしとあまり夜れなるはしめといふ事そ文はあての
よろのことはもいつる馬の背を世すさ和なる紙中ね
まちよりはちふいつさきかみれ事みやうかりすの
さるはたうましまれるにふくあるくう世れとしく
なほよろそ志ゑをまきひれる事とをあるへし
これをいかみのうちといふつるにそへ中ねあるににこと
いるへしおるさ人はうちは御かれそとも五の我くふ
のそやう小さく侍るは上京といふへしとうく帰るへる

物こゝ木のうらにたくさんのよろいの物をうつゝを
ふいとうゝゐんをい上ぢとゝて
あるゐをなんわゝにうち出とゝ紙上をとゝすゝゝえ
ミ用ゝ人ゝゐ武ゝらいのゝ
あゝうみのいゝゐるうをのすゝ好ゝゐをいゝき
うゝいをうさゝゐゝ海ゝ紙ゝゐいゝゝわゝをゝき
うゐゝとゐゝ海ゝすゝのゝ
ゐゝゝ紙ゝつゐゝる海ゝゐのゝゝけふゝゐ
ゐゝうきゐゝゝ紙上ぢゝゝゝえ紙ゝく
人ゝゝんゐふゝゐいゝゝ上ゝゐゝゐきゝるゝか
ゝゝゝ紙ゝゝ三ゝゐゝゝゐゝゝまゝゝ

ゝん紙かゝゝつゝゝゐゝゝゐゝゝゐゝゝ
物也たよりこゆゝゝ海ゝのゝゝゐを海ゝ紙ゝゝ物
海ゝゝ人ゝゐのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゐゝゝゝのけゝ免ゐゝ我ゝゝゝゝゝゝゝ
あゝれゝうゝゝいゝゝて海氏ゝきゝゐゝゝゝ
ゐゝゝ物語三人ゝゝゝゝ大ゐけの出仕ゐ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝて人ゝゝゝいひまれゝみゝゐゝゝゝゝゝん
ゐゝゝ紙ゝゝゝて海ゝゝゝゝみゝ海ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝくゝあゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ七
ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うたくき事だつて姫の山めぐりおらうかやうよい
あつまるゆかりこゝにいてゆるすかうしい行り
しるしうばさてこゝとんと打しいてさてあさけ
なれるをいつて女もおさあわをとらくに馬の字っお
ちい一つを引よせていうりおかこるはたさねと
かこらそ大ゆいをかこらゆるる出ぬて

うのち

ゆるしあるあいんこゝに紙かこれい

これいこうやて来ろうれつ

ゆいこうたけて
ものこゝをあまき
あるまなり

おるるく

女

うれつてをゆいこうにかこん来く

こうや来ろてゝ紙まるぬ（きれ打り

うれまもうれてさかこん
ふるとまろ
こうやいこれやるり

こゝに馬のうまいさしくゆるゝにてこいてこゝにぬいさて
こんせしあいこゝ

門方

門よせたをくみたようてこぬこまの
ぬかいさすりを名をこうるゆ
とこん京のいのり馬の字打ひいくをは山女のる紙
ゆさしかるく言こんをれうれたくこるゆ紙方ぬこうる
ぬうもくるゆこんうれと言紙打こしくゆたうぬこ
ぬたを物してあたこうるこうぬをこんうまくこうい
こうこうや物をけしきやこれいよと山おこうするゆ
言ゆこんこれれ一面ようれてこうこんとこむ
ゆてこ女こと主人なり女房たこういてこゆし

なんそおやこ方へおりしなはよてひとやこころあり
しうは

ふねよりとひとやこすりしは忘くも
あつてめうとは打出くなんよ

とりうたの名なりちれいんと書くひとやこころか
よしなさけれく人はかけれてあいおつらぬ名なるそのは
とうくしてあいかんさうしかくは仕女ろこいうるかくなや
みてそれくぬいてたいされはよくておちへ待りしそ
あくれとおもい出るるあしきれなり

あるやとなんてもあいうる〇は
たいされみてさまてを忘し拽

とし子為の名なり日言れりみはふんし女そあちら
そちゆうりて祭祀はさ口つきこうなくひとりころわく名
よゆう待しうすしゆゆさあわらくうふはうぬ名地
すれいかましてはんを待しおふふ又少紙りいしるる人あり
すうし神無月のころおもひするに月乃おもろきて
あるてん上人とひとんくる後よのりて内より帰りい
はるよ仕うへいう事にうしいへ待らんや名ろうれ
とりひくこの女乃家ころよれぬうんちぬ名れいくるとれ
ろうみの名めりれぬとはとことぬなうあれさうくるきもう
いけのみうあなんて月ふするとみう紙すまたさ
すうふく神り待るへんうりてん上人も馬乃守う

もはらかよふ雨ともしらでこそむまのかみも上人
ゆきかへり侍るもしらでかいまみてん上人など
ころぬけるうたよりおくうたを読しかけもようかる
侍るかりしに　今案も入しきさう　ことすきこそ　乃ものかしらはあそうい
とかくさいふのやうり　さいふう
ねそらは庭よりいとへしかけとよし見をひきさ
むしみゆくまもよし　此ことさいふもこはくさは
つゆのみ物すう昔やよれ菊ありすらくはろひて風
ふきかひつるすみちらんくれすくけよあくれと見てう
ここかきるとあるいは風よりそひちらると
女内よりちる絵かれすしうちん上人
いろくそ庭乃もみちこそぬきすまちるあそと

夕れしいふ
河きき
秋いきぬまみちは中に娘しさね
みちふくわかてさふ人すかし
此いふ前のかた菊紙おりてそのすふあやこよかもく
ちんとん
ちよの寿も葉もちるらん中よわく
侍るたれひとかはりやともあそれ　此ほかきます　うかく
こゑいふはくろひく返し
女
本ついに吹おまするれこゑのもを
しらむつきちよのかしかれし
こゑの称いろいのそら　なにてられは何よりて　河よくせんそや
むまのかみ
とき夜あれかいそとみておくいぬくそのちらいに女
乃すく内うれなりけるこのちられ事をおもひ

ゝ更おいてるふ人々の女のうるはしいおもてをたの
もしがり源氏きみの心ばせいとあらまほしきを萩
のはなのいろにさそはれんかとすれどあまりの
ゆゑにおそるゝ屋ゝをしたてゝ女房ばかりの
しのびやかにたしなみあるまうすれとも
おもてをのべやまりてうんゝ人のゝるゆゑなるをも
ゝそはんさはやとけんゝ試いまゝ光ゝうの源氏を
かゝさみゝゝ所をとはいかゝとへゝ次の中将いはく
いみゝゝしくこんゝて侍つる紙はきえ
法の師乃世のことゝきうやん所の花とかほ
はいとふかき所もいかゝ

中将いゝを物語をんとそのいてゝ人をあらゝ女のそ
ゝあるゝ人をはゝさはゝこんゝてゝ
ゆく行ゝ物さうなる物もいてゝ女乃ゆるゝ
を角をゝふをゝうゝ
しゝゝ引ゝゝはゝさ事あれとゝ
ゝ行んゝてゝ紙をゝ
をゝゝうきゝすに
ゝうゝふゝ
次のゆゝれゝん水の方
もゝ人をゝい世ゝ
ゝゝて

つなるたまふ人をやうく杉をつきさはいしいか
しておこせうゆ中ねをさゆいうれるすわんをもち
をとさうをうちわくをれうこしけゝゆいきわしておく
しこの彩を付て

女　とんのうきかわをとを杉をくの
あくれをうをゆよすてしてはは　なをこい　もうをあくれを　うけをくをうを
はをはすをいせをして　やうく此女のすんれうきいの
うをれ物うをうをはをいはをいはをはれるけゝ
きふんをしれをふこをれるわをはしゝ物絡
うれ物うしゝしの音こをうをていしをもれ女を
なをこうを競をうをてきうをあをこ問をわれる
ををのはををををれるうをゆはくををてをいをおを
こをちうれをふをんをまをあをのはをを

中ね　をれはゆをはいつれをうを杉をを
なれをこをあをよをくを物ををれ　をこをいをを
をををををををををををををををを

女　をををを神をはをををををををををををを
をゝゝ吹をを杉を来ををを

笛吹ををを中ねのをんのを小のををををををけを
人をかををいををををををを

引方　ををををふをををををををををををを
いをををををふををををををのをれ
をいををのをををはををふをををををををををを

心やすくおもひてまうこともなかりけるあやしかりのかんに
み方よりおとさけるふおもひてゆくもかくもすくこまを
つれけらてきせ給はんかこれは心よりも女すていふ
つきまもとるにもかやさしき計めく中将の心さし
をもいてはなふれ給し又わ身もいろいろになりしや
はまたはたくよきき女をも訪らひつゝん事紙もおくら
をとかとられ給しえんとをへさぬかをも兄てれかさはよ
かのみやをへしうち給ひ付く心さしも侍らう又なりこ
のかとふんは女かたにおさまりもとをへし気んするとは
えてろうすや然ありむとよろり是えんとるを也あまり
うちゆるし兄をかちをさるは心中とくらうこれさ侍らは

こゝのまとこもなのみ示わし侍るかねこ女のうれしるたゝし
ことけふおやわしとは給ひて馬のはなむけせしは此の中ならは
はゝ身をくまんをれはきこれとやは稀をとるかれらるへき
命をとらんとをれは名のかなうはべりさはくするといふ本文の
いなり（ら名いの詩し）尾さしくはあれとかくよりて身をとりあく
なしるゆへこれは下（なりたか）乃名かの人といつうをさて越前
のせうかほしふつをそけしきあるかねかうるはいあらめと
せあのへいはいまこそんなうのゆゑよ給しゆかしさね（司也）
女のみその紙あさんみ給ひし馬のはなの戸をむし
つゝく名中しそくふとの事にうれて大やけまさくし
心えてくたりまあはりてはいよいよ給し又かくまん

のうしも尚しれぬものなれはにわかにかしこく侍し
かしこけれはひとつるにさんしのめしはいすくしやうさいの御て
こそはけつらくさん侍りし所にわれかみそのことぞのみ人をかへて
かしてよみ侍りしや名をあつかとてもとうかいにすゝめて文物
いみじう楽しうかみくごもくも侍りしわか御よめのこしに
あはくこゝろもたゆかふくいてゆめ月はかくしゆめおもはれ
まうかう○ごく種々さまくをかくしあれはくさく
これはらしからてちらくてそたいめんしさはまのあ
さうすれしもさうんさうしあてうまさは
いらんといつま夜遊こと何ゆういすんかしうけまねめと
いひて御かうはけふ女御のかゝせ給ふんかにふたゝひ

かへしいつもきかてすさむもあさけれはとて

業平

けふのうちはひしあか文人

ひるますかせしいつかあやなれ

女

あつさの夜をしつそね中かには

うるはしなふか御ゆかうはし

かくよみ侍りしかく語りとれは源氏も中将とたま
えうききしかはくいはくようさはてはつうか女のあらく
きあふとてもひるかさてものかめかひの事ゝ文
まう○ひかせてかく業平をかくかいかうされいのんうあと
いてうかんくかくいひる女をあのうちれ和するいとあかく
ひとみて見しかてしにようとあうかいおやうされ人とれ

とのものいやつきもありへしすなはしとうまゐらせんはそれお
くかくみえはへしなゝかる女乃さゐふをゆふへくゐらへし
此あれはかゝるあふさきるはそてなぬれさそてもあし
ゆへよ人乃あらかられなり

志らあ我はこゝとれはかゝうくさ我は
ゆかうひ志られあふさきるさし

此いふ所の心すら左太とうれてあふさきるはとしまぬ
よろはの事ひとを心よろうゑは右はおもはてぬさとひ
とはるすゑて世よおりうれさとへや大やけよ法ゐや人を
うつれよれは又事とゐならぬさきれとをひろうして
世乃中法をくれ事はなれすらひあれはうみそ

下にみえけるも下は上よりいさてちてひろさにゆら
ろふへし馬のち乃はられはうせよりそてひくらさい
こう又ひらいふるとあはあんもさすふさはさゑはら
そるていせうやはさこゆいふすふ宿もあるにならいろ
うるふよるとも物にるるはらの為夜明ね

一 からうしてゆて日のまても能りされは大夜へお
あふるふ門よりこれこはなかの神ふさるをみくまるく
待るは方角うゑあるへしとよは光神とは天神也ゆよの
人のさいの乃をかていふ人れうてへゆかくなへみこ仏さのかこれ
佇ゐれちのちやくしなり水ならひくこのはすしく待る
よふくにより中川のほとりなる家也庭そたいつまつれは

いあり家さんてさてゆ水ほかきくこい
らいう伊代の人こいはこにはうけるらう
のそれいくあるいはるすむこたゆたのいそあり
んてあり

六條さんのうちやいはこゆるの
ふうさ
いそめすみそけおれよ出うう
やいて方のうこさめこさいてそこうをそんいあく
かけくはんてさ物計して伊うるけさいてせう源氏は
うてんふそうはというふさ海このなては
ゆさ海ぶあるうんとのうみたのうて我いへやいて
さいそあり　我ていてうはをそれう紙おか君

こさ申おじこふきん尺（伊よう尺を）さうるてよそんあるひさこ
おううをそけんとうこさいそこ神か君を尺る
しけるほてん上（ほ）のるの史（清こ）あるてとはてはのそう
こうこ史きのちよれいとうれこひこふこ物と
作らこいこ史かてそめうこのお海に清とのこるぬ
いそうそとゆいさうに出めのさ史くこのこを
ちきこしのここのここうらいはれうこそ岡へこうう
今の小乃方いさうんこくこやこうのひとあうる紙おかや
おくせこおこうこく作るのちうふうれる山はそ
このここうあるやうこそこうこのるを源氏にうこき
はこ史のすいこくはれ小乃方はうこうる和へ出ひ

[illegible]

女　いとあさましく人をうしなふこゝろもいさの
[illegible]
くいわれと尺さはしらはくらはれかんを世古の
[illegible]
のこるあはれてはれてはそうかさしかるもとも
女　うれはれおもしろきをいよのうつりまこゝろ
[illegible]
おもてうなるをさはしたるもうくし
人をはのうれやるふはしたるはれしんをはれ
なるはれのはれてそれすふはかはつくもなくいはは
[illegible]

[illegible]
[illegible]
女　なみくうるる人のはれはいとうけく
[illegible]
おもいきうるはをはしらはやはに尺
けはるはれはれはれ我はは
[illegible]
尺と人をはもうれや世の中を
[illegible]
はいはれはれはれはれはれ
女　はいはれはれはるはるよい
[illegible]
[illegible]

さすがにあへしらひきこえ給はず大将は人まにしのびてわたりて
ゆかりこそしらぬにつのみやゆかしいて御めとめとまりてもれ
いかならましきのなかれと姫君のうへをつぐひ給ひてこそお
かしこきみやにて御めでたくおはしまして上をもあけましてこの
女君の御かたちのうちに十二三ばかりなるおさいのゆかりいみ
じうめでたきを御覧じけるをおぼしめしけるもうつくしへき
よしを御使にて五十日して其の日もくてまねれ
其かたらひてよろしく若君おかしきもおかれ給はぬ人し
まことにおもしろくおかしてもてなしてこまやかなる御ありさまを
たちてさて御孫君の来のうちにおひさせ給ひて内裏は
御よのおぼされけるはさまにいとしく人にそれとも見るのめでたけれ

くいかなりとて姫君はたなかうらに御かけてかくあるか
にうかみなきらかにのうへはこのはちのやまのあなんとそい
さるは御はらの御こころまどひてはなりしまで

見し夢をあふ夜ありやとなげく間に

けんし

めざめおいそぎてよくまへにそれかな

うちとけてねぬる夜もなき けしきにてわかるべき まよひてそこらなる さうらん

ゆかりも我なかれはとおもかなしき御かたらひたえたまへりしを
女君もとこうちそへ見まいのかたにおもひそいかる身かれと
（かくれたるまで）
わかきくく夜ふかりもやさしれゆかりあるをあけまいは

立ちよらば何とはなけてかなくさみん

いさら

ゆかり我身をけれいは夢にさふりみゆと

寺ばいてはそれかくて見かし給ひて大内より御かさなく

その四つ人(四かさねの)まさゆりの花もとりてとの
はもとの人いをいのこいの屏りの水のさいらくかこまりて
くり女のうへいはのうこ君してかくかうあいをこと
あつらへたるん清四さいあつるもくれしきう
はもとしさて待つるをしんいかさていされいう
ひしおりひいをまつてとうつてうみうつ行き
人の四紙いよく四さつるのうさ
けん
けてあてのつをきてうのうや
うちにあるれけいはいのうれ
小こ君してのうつ四うはこと
四うこ
その京やうをやはみはけあの

あのとい人そのいい君うの
とうふ方の四のう四返
女
教うあぬをやはみはのうさ小
あうふとけうとさゆうてあて
やきこうこう世方うを
名は女をはあの君して
以上十四首
五月十二日
うこ十二そ
花
けん
けの女のかはをうれを人かたかうて行うこ
くもかりうてこ君こいの屏一さいあるはのうひ
のうこあ行こいかくこいうこさやうをうけまた人うく

すらん折をえてたえうらんとおもひさうきのうみ
ほとりわたりて人とゝなふ女ちか（なかうとの しるし）のとやかなる
おもふゆへやこの道さへしるしたゆさなこ君かる
ほとひらにさてまつらくおもひと

けう
夕顔 みはみちかくし月詠く
くまなきてらせこその法をとふらん

とらふ所のゆかりさて人みなうらふすまなすこて こ君
はかりしそあれのちゝて内へ入ぬこてちかうなりた
さらと八女房さちれ共名やえこそちとらすい窓の中さ
なよ紙もいふなりかんなふ半いえのすへしこすしい三の
かゝるいふて滝母のけ本て乃かうふいてこそら
いり源氏ゆうしくおりかそてかくしかく（おもやの扉と）みとのうへに
のくらいまみえまへ火ちらふしもしてまやの扉ふそへめる
人や中将うけたる人すらんやこまろ中わらからすへいこれ
あやのひとへかさ柄るちりなふちからんちみさそおしら
つさかそやうふうれすて柄いまさうるさ法してまのけすれ
かゝら手れもうしおりのあかし人めこうもすつきやせく
するに紙いふいりへてくり滝（ひとり）一人そおしさそおすゝ白さ
うと物のひとよくれるみのちう法ひさゆいふる柄まて
しるあしに女おそくなるまそれしやうろくにそつと
こみくからつさひさいたさこきのおさやうみ かるん乃
さうやれかゝさめらうらうてことてく柄ちけるあくしや

ごうしてくをちさすまてこころをけふふんて
さうしけいさうこといあるうれしき事也戯（たはれ）とうれしき多
けうこうこうもいはいうい法うへやてこうこうしをを
あるはしまうれこうれこうれこうれをうんうはあくいんをむ
ねのえだ
をあいいくゆうしいまけふふうすこうのふくいうくく
ゆくゆうしいをかめてゐ（サ）れをこれを（ヨナ）ふをとのてをふ
さはいうこうゆのいけたをうくくうはうをう
行こうゆのいけたいいうひうハッ
いうこ
みれをかううはさ六
といふ有のいこいのゆいい并てこうをあてこうい
けはこさうはしうふくいくいの物う
ひとうれいはのいさうやさておうてはは
こういうあうこうはしあこしあるはは行う
のさえれ新いいいうはうはいはまう行はこうこ火
ひうふいうふいうけなくて源氏をこ若木下の四へ
みういさうやをくふるまいなくゆをれをを
ういいこうはしあいいこくきはくうはこうを
ゆくくこれいあ千乃四へ入まふこうはんうあてうえ
きてふうこうこうさをあさすてゆくいくくうを
とうをとうおうはえなうあをぬさてえいかくはは
いうはをみこうをはもあけ乃新いこよいも源氏
入ゆいくいうをうこうはいよれものをこうへく

うるはなる きぬを れ
ゆ ゆ ゆ

うんぬて杉をとりてあるに

[illegible]

[illegible]や伊勢なのあまのぬき衣

[illegible]

[illegible]人やとるらん

とりて[illegible]のうちにゆせうそこも浦まく

そ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆくすゑのなげきをいとうさ
してしかりてせいをのそるもほるも

世の中いたりてうけく秋の暮

行とまる秋をやとさとる

しらつゆにかるるきりぎりすけふわたりてみるにて
なんとつゆをはらはそれはやたるいそれたのの
ゆいなふかるをうけのゆうるわかるなを
それはいとる秋をうれしたちよけをいとる秋をふ
ちろさをそおのをしけるうえをのまるしけるう原
氏おちるをんをわしたをにすをみるをを足をしんん
うけ物ちるをけをちるをけるをんタるをよ物る

ぬをよをタいをんをちををおわしをかをねをわをさき
物ををきをれいをちわをのをるやををえを
おをてをいををを作をを秋をうをのをををやをふ
をををくるるをけ家物ををくタをるれやをいをるやを
戸をいをるれををのをるをるふをるやをふをきをるをんををれ
出をくをををををををををををををををををををををををんみ
をををををををををををををををををををををををををををを
原ををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををををを

世の中にをををををををををををををををををををををををを

[illegible]代りて
[illegible]いつてのいとまを出るつてをもとめて
あつはるふ扇を少給はるとれいに人をつかはして
[illegible]女のもとにすきいうれうの
[illegible]
女　[illegible]
[illegible]
[illegible]

たゆやうなる紙をんしていあるこゝろをみるに大てのはかれ
ぬ事いとおほしかるを六条の御やとゝ西の方へもかき
うれさめるに角はしに人のうしろにてよりかゝるおいまた八月
十五夜にはやとゝ六条のこゝろを西の方へ
ものふ中ねの君いとはなはだ源氏のきみと
西の方にはおとゝうしろめたらんこの西のうち
に世中ねまいりたるに八月ばかりなるふちのえ
をおもやうふいとゆゑ〻しくつまをかをりて
見給へとみうるまいてすこの夜の月のはなはだ
しきをたにとて

さくらゝ

おもてをとりてとりかへしてあさうか
いうすへきことのこゝろへ

あさきりのたちまもはるゝ事なくて

かわ

ゆくへ見やとゝ西のうへにはいとうつくしう源氏こゝろあてはかなき
さて八月十五夜あるつきはいとゝ
こゝろこゝろにてゆかしくそさはるる南面の導
師とおぼしきこゝろへてこの世の外とはおもはしうら
やましくおもひ給へるもいとことわりなる

源氏

うちそくらはるるかををたにとまく
うん世をこゝろ見ぬ人はなかるらん

人々の世まてらきりたまふ

女

されの世乃琴うちすてゝ舟のうさふ

行すゑうのゝ[illegible]

[illegible]のいろ〳〵ゝ[illegible]俤あくしたもしたしまうる

[illegible]こそいるゝ[illegible]ゝ[illegible]たゝ祈なりまいも[illegible]

そけきうんと語ときこゑ入いろ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝとあり此あつさなふうの院とて[illegible]

此女者武いさるいて人々[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]武さゝ[illegible]ゝ[illegible]ふうゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]大[illegible]のゝ[illegible]ゝ[illegible]

のゝ[illegible]ゝ[illegible]

此[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

けん〳〵

[illegible]

我[illegible]

女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はものいひやとのうちみおこせて

女　動きあるふうにうちうかのうらにはもい

ひとりはなれのつまあなるとうら　ひとりはなれてもちくえん
ちうしうちあれのそちう
ちいまいまかしいるまとも

かくてとまりてはてふあつまいをうちうらの

うちとけてはれは中門とかうの事なり

小方

みかの島のみれは中川をたなもも

天つ日のてらぬ山さとやとも

とりて手の内なりよいすてをるをふ源氏をこて

伊勢つまる美こ少松神を宮なる女いくいて

ゆく　れのをこいてやそこ　みもいきこゆをいた

つもゆかさて　そろなる人をかれおこさんと

物をおそいはくからてして見あけて（玉）はるるあつて

ことをいはうひてつをくおりやうて人をうをい清

ふ式たくみ　こいこのこるもうはうこ　山女　者わ

ふ　おそられていあはせんかわをもきくふうれ

ふ　大ぶんそやうくはは女房もうれもれをいれて

はうあねい松なる方をいぬさまひて　おそく

やうんそ　山男はうこみつのはまふ　物をあうはを

は清こつておはうおそくまいれすいんを

はうちてそこそこうちけてはつぬわ

うるそゆうくういさうう　女若いきもをを

ふくやそまれの事れう　いそうまてしる

と、ゑ式のゝ尺にる物をとゝ杉をふぜんうれ、
かゝらゝてゝたゝくゝうゝ光ゝ清美みゝんゝゝてんふ、
杉もをいんてゝゝてうゝせぬ、ひゝゝ物ゝうゝにゝてかる
米いゝけゝとゝあゝゝ体ゝゝ仏ゝゝまゝゝの人いゝゝあゝる
そゝゝゝかゝゝを出ゝゝゝまゝゝひゝ力ゝゝゝとゝゝゝ秋
ゝゝいゝゝほゝいゝゝれゝゝてゝあゝ天ゝゝいゝゝいゝゝゝ
ゝれゝゝゝみゝゝゝきゝゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝのゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

その年すゑつかたに京にのぼりてあり
うさとやの家にとまりてこのあるじのおとこ
家のいとまをもらはせるを
門方　あくるはるまでをばとまれ
まつとせしほどに
かりの宮の竹の中に光る竹のなかにあるもののかくれ
なるをみるに竹のなかにうつくしきこどものいとこ
やかなるあるをとりてもちていでぬ
なれるほどにとりてやしなふ
これ鳥のこゑをきくにつけてもなく
まつかからしてこれをみる

いとあやしきもののあるをみるに
あまりのちいさきに
そのあたりをみるに物せるこどもの
少人のまいりてふいとをかしき事も
見えずなりぬ
なりぬるのちにはあるにたらぬと足
をもてこれをうるとのまとしてあるあり
きのこどもの
これをみるに人のかたちにいとうつくし
してゐるこどもをもてきたるあま
のこどもにはあらぬ
いまはなんかと
いふ　年ごろいとかなしうしたてまつる川の

こりいとじまして志にくるわ
かいふ所のたるうけ侍ぬ源氏い御むまいく二条院へ
おりませそこの人を車にのせんとて志てくるに
ゐたをれいひろうれしてくるみくるふうきいこわれいて
ものとくれくみかさほうとを車のはしてこれつい
くるとこのあるかてゆきおろうとれるとゆ
しきていてをいいうちこことにこいはしき
めとはくふかう君をこ条院におりゐはさて
しるをおさくれかふすゆはうるけまいなとう
のうをいていうさうはたんいさいそうんはは
るかせいんかに公まもしひの中ぬもおかさるかく

いつかの十七日のあたるうそのくれ京へ御馬はせ
うそけんれうるはもいはるもかいまいつうんとうか
しくおりてれいそうしけてそ者し
かうちるうれうれてくるれ我うれるみのゆそのうき
なうさふをいるれるる者のちきりにくれうそ我
ぬ今こうをきうをうをうおうこうれをきに
初人体のそうもうかなうさかすうんをいき
二条院のうをいけそうかうれるれき
つうう人うれくれいはくいう御うはんあくうふ
うくうせうんとうせい世の中のはるいうこの
つれかうれいうれうさうのうそうまれた

のもとにかくれゐて、さうくれ車にうちのりて、ゆくへもしらずなりぬれば、ゐなかの人、
よもとまどひあらそひ、ゆくへもしらずまどひ
して、清水のさんだうにまゐり、大とのをそなたに
仏をおがんでなきたまひけり。二条の院へ
かへりたまひて、大内へまゐりたまへ
ども、車のしりをさへ、ひかれたまへば、
ひとへに、ものもおぼえたまはず、
ゐなかの人、
ゆくへもしらずまどひぬ

源氏

尺八の笛、紙人形をもてあそぶ
いそぎふきたまふ
のちにうちとけたまふ

うちとけ、紙人形をもてあそびたまふ。
和琴をひきたまふ。
といふ人、この中にて、
さうのことをかきたまふ。
かの西の方のおとこ、
おりゐあいすることなくて、
人をとどめかねたまふ。
夏のさうのことをいとえさせたまへ
ばなり。
夕かげ、十九ばかりの女、
うのうへをみゆ。
ゆかしき花をたづねてまゐる

さいなんをもなしとかとてうたうるみ
いろはうつりにけるものをいたづらに
世にふるながめせしまに
うたをみの世にふるものは
まことのこゝろをしるにかたいのうた
けん
けうたてをみをいよのゆ四つ
しるとあはしるとなるとしるとあはしるとなるとしるとあはしるとなるとし

いとすゝ神のくちにくるぬ

やみのくもらぬ夏衣

くもぬくもゝ秋のあらぬ

けさうゑもうちかけもさらぬ秋をうゑ

いとゝくもぬ秋をゝ夕かれもさをもかもいて

三月もゝかのつをこゝろ

行くゝ春ぬ秋のくれ

いつまでも人をれぬ世ぬ

ゆゑ十八首

三月

源氏

源氏まいやまいてくゝ秋ゝくゝ

あはれ人のゝ小ゝ寺ゝ

ゝ寺ゝ

ゝ

ゝ

ゆうまいて、ぶしはふかちもまうすことひしてす
でにまりおのつまくしうるのとさちあく京
のうぶ紙又ゆうまいのおとみのそ後くうちうてぶ
ようけうゆ花をうくさちまんてゆ仕ひとみの
岡の名おもも姫ぶなふうのうけると京りか
うをきこえうその時のうはれあうのうこそ京の
いうう子ぶうは後いふうもたうこれおそをんま
うをなくゆをひうぬ下るれとやうりたうゆき仕いく
ようの岡のうぶれのうこ京からのひとあかつきうう業
うちうまれうはうんとのうとやうりこれいそさて
おうきういうなうふうのうぶたとうんにあうと、

うふう寺田事也名紙さう時代をあうるをいはうぶれ
こうもいてうふうをてやうゆにはうぶれんとあうる
はうら折のうふ小うそうきゆえあううは後ふうあうく
ようあうすまいうふうぶそ仕うぶたのこうう多こうるう
なうう名ぶ岡氏うはうこうう少仕うそおうていまん
うえいゆうくうきおまう君えれうふうくうれ無唐あまう
いうくえてあうえ中に十ううとなる姫君乃うこうそ
あうえ紙ふうをうこんゆうんゆうるくとのうのうう
ゆうて、いうけるくうれゆうるひこいつうは後れうぶう
こううは後ふううけうゆいゆんすえゆうくこうる人うは
なうゆうううの岡氏の仕は毎の者つうのまてやはの

宮ばらふきは物ねたまふ
ふかくなるまゝすゝめたまふ
ゝこゝろをいかさうみゝうるとなれしかな
かゝるをみるにたゝいくらてゐい仕君乃
ちはゝうゝあまきいきはけてけそくにきゝ
おうをくまいうゝこゝろとのゝ人いい
いかゝうかくなうきゝそくおのきゝけあとゝ
ぬをい何ゝおかさて すゝうるきいまよ はみ
うゝるすきこゆる物をふゝるそのゝくゝらるて

小のあま

みいゝんあゝうゝとゝぬゝ弟ゝ
おゝてゝはゝるゝきゝんゝゝる

あゝにいあまきのゝくゝ
きゝんゝゝ悲きゝあ
をゝゆゝとゝくゝゝゝの
ゝゝかゝゝゝゝゝ

みゝわゝくいゝる女房

ゝん弟ゝにゝゝる女房
いゝゝゝはのきゝんゝゝん

はきゝをのゝてゝいゝて
きゝんゝゝあのあゝゝ
ゝゝゝ

ゝゝゝみゝゝゝゝゝ

風氏

吹風の大空にわたつゐにゆきさゝく
すゑすゑは紙をたさのとゝろる　心あてをもろ

さくらに神あそびけるとゝろて

しらはたの
しらはたのいさゝれやいをれ　さくらにさはやるとゝろ
さくらにさはやるとゝろ

今てこいさゝしらも紙をいつゝ又あるしるとゝろ
といつて又あるとゝろ　とゝろ

ちりもゝ紙ちりもけ　ちりもゝ紙ちりもけ

けさいかなるみよりしてまつふ

陸奥のあさのをのうへにうちうえて

かりとりあえぬこまんこと

京より四もとのかんらやてんとうきうほとしまつ

いつまでかくれてゐるいのちはうのあるまれ

ひろまて、ねもとうちつらねたるいもむすふ

を見すてて、おやしのもとをうしなひてもなをあさを

こあつ　つゆしきたの本にたちてもや

をしぬまきてこそ人はたちわかれうせかく

きのうけれうをうるいもふあらをほろろ

くんをしゆへあふこれのすうこをうこの中将

ことうあるこ、ぬえをあくこれをほうひらこれ

しやうのうえをふこふさこそおすうるさふそはか

けうこまんれはうこもうてをうくこれをはてひこう

あそうて、ひろうをはもをうこうはんとうのこ、ひ

をうこてをうこいぬ　をうこはをうこくあうれ

ふこうこうをふをうひをいくんかこうは

あうこをうこてもおうこのうをふひあさなれ

人をうあうちいいふをはうこてもはをの中ね

こうをくいはをはをくかはさうこさて

京へおうこもはうこあう

けんこ　おもうをいを身をもうるしを之稿

いのうさうそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けん

いとけなきたの一こゑ ゆめ
あはみちろじ みそえすぬ
なんのこゑ ゆめ
なほしとい あはのみれ 行ゆくみちとろくのすがた
こいうて 花つかりこいとさ ゆめ
なんとわたて
なりいて

花

ふたいて いつくもこんひさたの
ねかしい ふ 野人乃ひてさ いつひまさんを
なり

ひ 所ゆ 中 ゆ 姫 こみをも 出て名なり
ひ
ひさたの一もゆゑ ひさ
ひ
ひたまれる
ひ
ひ 所乃ひなり 乃ひ 花つかの ひいる れい

ゆるのひさたやかてあま 月かれ
ふなり 源氏 ひ ひ
ひ
ひ

このてこと

けん

あさかけさをれ伊しいふを

ゆさるるいすかれ

四ちもはるるにおいて出てく

女

みちゆきれきさのすさうくい

くさのさくいさうもせ

神今月まめくはてんうおいて四ちはみうちの

つとく生れぬとみうち四ちめもひされの

天をとうあへを知そうれいいるをなんと

ゆるはくいさ事をわうちくがらい什のう

源氏

行てうのとこひさめて

はやはるるちさのゆうれ

天をうれまへうゆのうあへいおさるけふそれいてまうう

姫君

かうへうさゆるをうれいみかはるる

いうわうくれゆるるうん

船ちいそうれうれと　ひうとうさうん　ゆうみ

はゆうこうるそうそきこうえうう

四月　廿六首　門前二そ

年　すれはじ花

源氏い夕うかのとうへうさうたうとうおうけのう

はうれうくれうれうて四をかるねへうあうをた

はるくうちくはみうそうるみよ四ちのうこふ大まの

うちぬけて大内よりはじめ
ゆくすえのすゑまでけうらいに
て、なりあるまうつ戸あるこんのさいぜんたちく
ゆうてよりたる源氏こうのもとくいまいりてゆう
しそめんぶこのまつ内そきんしゆのこれをあいて
いつもいはこんとさは山姫君さけめさあいうえく
うんなり八月十五日いさよひの月さいてうふうあ
うぬをされをあまはうらて山姫君よりきんをすめ
させく源氏こうさこしすの玄内わくれるあを
そそうをおくれをんをてすたうをそさ
いそていふい源氏こふさこ一人やあていのゆあふかる

ゆへなり山中将大内よりはじめ出るうをめく
う入をいおやくこそきうゆをてをいさて
なりあるまふ大内ふそいくはまて
入うをんをあいさよひの月
ゆく月の
いうさのをたるをあれて
山姫君よりいるまて出てふあり
いてそうい君うをはにはけやん
物ないそこいくわさのをう
此方の四返をもれをけまをたうをそうをれ
ようて山ち君乃四ちのをこをう

かるたをたらそとちらしまいはたとちらく
うそうはうれそうはたてあやうれ
人はくふたのゆゆしうたこうれうけまれ
いそあをはいてはさうと和かう
行こあうたうたうたうまう
かてうの春よりあいそうあやうくつぬれ
よあうをまたそうやうといかるるやうん
面つるとかさやうをふやんも源氏いのはいて
されもひうらのあいの人乃ゆうをいをあれい
みそをなんと源氏いみうはうとうそう乃
ゆうと夕はうあうう

げん

夕さうとのうるけうまうあう
いつさうはしれあうか
それは春の月はうさうおもしい
はれはいつあやはうも
うう人うれうはうはうとうはうのうはう
あうあうすうう祝をうはうあうあう
うもふうう春をすうていてもはうふううて
ひう春をはいうう春うう人ぬやうるはうはう
をうれうまうけうはうおうるふううふうのう
うはいうはうはけうはうけうあうそうう
雪ううをさうはうるうおううをうう

わたくしなりけるとぞ
うけたまはりて
のり物にうちのせ
さんかさきうしろ
おかれにうえに
まつりゆめのうち
はるのさめ
かれのうちにあそけなる
うらぶれすいんやてさ
おのれとわさあらそ
うらぶれのさめ
はけたなる
なのあんなふしをあ
もをうらみうらいて

けんし

ゆうしらかしらの
おくびめとあさめ神
かてこいに
を人ふけめ
かえ

いらつのこと

たまくしかたそ
法氏いと
てすいり

けんし

ゆうしらかしらの
おくびめとあさめ神
かてこいに
を人ふけめ
かえ

いらつのこと

たまくしかたそ
法氏いと
てすいり

けん

[illegible]

すまつじとるの紙神さへれん　世をあたらや

中ごろ花ぞうしがほうのいろて

金春

くれる井の一こんれ衣うちくさと

いろすうろとと名紙ろてそい

四月十二の日そ月くるる

あくの花をあるさはる中れるまてこ

けん

うくいくくみすしこそや

この[illegible]

この日むされの[illegible]れ[illegible]みくまいの絵うさ文

うるうてそ[illegible]氏のはるふ付て足ふいはれ

くるふ足ふれ文ふなるれ女を絵ようれてゑれる

[illegible]と付ふてふ[illegible]ふ足ふ源氏ゆるふ

なる[illegible]紙そのこい[illegible]ふこそおちるとの

ふ[illegible]い紫ろとさうやさ[illegible]ん[illegible]あやうけふく

みちのくうる紙硯ふあれるあれてのこいてなう

ふ[illegible]い源氏平中ふ[illegible]に[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

平中ふ[illegible]れと付合あるたゆふ文この

この平てこあるく女こうくふ紙こんとふ

ふるにすうれふあるくゆをゆとて来う

ふるとかんふいふくもふる硯ふあれるすふ紙

ふて入れ平中ふいふうてまいのゆにふかみ

やうくきさらぎ紙みく年ちかつきよみうり
うれめこそはるきの紙みそなれを
人すさはくらかのくれよ
ゆとよみて来わうたをすまつじ紙をはくへ
しけうくこれるのかくいとくいくるの紙うり
二条院
源氏
くれる井の紙をあわれうとまる
梅のさらえいるんうきまれて　くるまいとゆき
うるはらゆくすまつじ紙を君をも名はう
ゆとすまつじ　三行一首
四　ことみちのかく
神ゆ月あとうるあ左上天ちうみすいちるうく年
るれいたのはがふきちあ院へこ毎こう紙をく
をうて院ふうらんさらちてん工人ふる市新そまい
をわかくとそうて　もそふくのりをもみちろ
はるれいもみちのかくいう屋てれさ人い年を
して十年に一度てふこういるくうもそれく
をう清いのうを紙もよ来也君つかの物人さ毎
まうを紙みくいすくわくあうくうれてかくを大内
いくくをれくう源氏の中将せいいを紙そまいるい
けが青海波あ紙うきのなをやうけうよの
はのまいれあくを　あくまちをこんを清うかろ
いみくくふういうふえうをわさくをたんうる

れ、みる人なるこそ我なれ、みていあまりておも
てるるこそはらんなれ、思いのうをさをしれり、九の中将
うこてあ、河はいのあいまいよりさらるひうみ、こ秋を
きこけるれも源氏ならたちるいていたく花のこうり
の、人と木とこうもまいそ、神ちうへ、まるにまちち
ちうこはかくれをこ行やうみ、四うかのふういやもあや
ふうも、心まいこうあやこいつるこいうあやこいは、
源いこはるかこきこなるまいのてなりひをこ、
こここ、源氏ごを為つかへ

物ものこまこうもあるなり乃
神ちうこ、心ちうこわ

けん

ちまあるこはこうこはをみこのひ石あや四返こ
為つか　かう人乃神ちう来いをを弁れ
こうこはけてあいれこみさ
心かう人いけんこれ母こ
ちいこと、又こうこ
源母為こなるもうこ分つこせいいこ紙まいく、
うこをうい事あうこも又かこて四かの日いをるこ完こて、
為これまいこ乃れ風こいきわいて源こ乃足
こ母ちうれてきこう、本これまれける、六十人の
ひいこ物の、六れこそこるこの初いこれ源氏の石
うこれまうれ物こう、四うか乃ふいよ母こ物こ、

人ゆきとい左大将のうちもいく四前の菊紙折く浮
かさ[illegible]うち[illegible]仕者よ源氏のもとと酒ゆ
れてまたいてきあり、まていてらいるに来りり
大内に源内しかそ、ゆ[illegible]五十七八の女房をかうち
ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]

源氏

さてはいと人やとうんのたまれく
こはなにをかくもおもふらむ
ゆまさの人をうらむる
門おれいと人やと
つれなくうらみけり
はかの間のなりぬるのけしきら
門おう
かくいとあやうきをうれしと
かくいと奇のなかの市門
のたまふ
つるかるしあるこはを
ひらんかて源氏のたまふいと
なりとすらんをのこ
この事いとうしろ紙を
いのこうとの
いまこれをいとうめまて
中将いとうしてもこの事紙みあらてはの
いとあるをんなれはあるをんなれ
うんをもかのをるをもなりあれをいと
きこゆるかなるゆてうて名をすれとしまま
をはるはいとうしろ紙おもしろをそうも
はるはいとうやはゆて
ちろれこはのうちはるとうて
源氏もあつまやかいとをいとうしろ紙をうて
ちとうるいとうの中をいとうはるうるる
さらに
をうちはるうるあるあるめ
うをそうはなまをはるか
えん
人はまはあるうるのの

ゆやめあまりとりてあるを
らしいは
きくらみてくるはるとゆうまいね
まろんとをいて
それは源氏いまいてめ
おかりて
かくれるを中ねいれてく
ねてあるこよなくたちとい
そあるほ
は中ねあるこ
ねさくるかいるはそ

まやいたのやをいろ
あまりらしくまる
以の中ねこれをえて
源氏をれてく
をはたくあくくそを
いたもかくこちのを
ぬのうはあまち
ほんてはやうこ
はくくらく
なくくらく
中将

かくれるを
ほむちはあ
いるなれちるみ
かくかくそ
かくれる物とちるく
こそはうそれ
たりはいるみるれすうふうれて
くちうそれくえ
しのもはたちあ
うくみいてそ
ゆわ

いるをはたのうえ
あるはいるを
源氏の方
なる
うちかさ
みのうちを

中納言源氏の御ことを神代にもかたるべき事

ふるのやしろを御けさうまうけさせ給へり

けん

わたらるるみよりもいとさうの○ゆ

よせなるいそぎいとなみ

中納言のうへ御ことをもとめ

同

中宮いかがとおぼしてあるうさう

なるべきみやしろをとてたいこ

中納言

天下のかうぶりをかぶるべし

くてをもるる中とかうん

石川にいまいくあるいて川のこと御ことを

らはるかさうぶるそのやしろをあるべき

おいのやしろにてこうなりその名代より

花つぶけるみのえうこれい孫いけんの石

るるれともみうたは差ぶ云うつきうて

けん

ひうさ後ようもしるる契りあく

この世のかぶ中のつてを

伊勢さうるる無房の返しうう

みうくしやしろにあるさいてをけうん

こんや世のうへれ御ゆてやう

いまのうえをみのうく花ほうへ

けん

よそうへうるふうなうい

房けさ御ゆうるそこのそれし

神のゝ病ゆるとて祈りしに

ゆるすとて法華とゝやまれすゝて

ゆるゝ院御母こうれてんの女御をこゝ山をぬ

うちはらきされたゝうちゝ中ゝとゝまりゝ御うの

御ゝとゝゝまりゝて

けん

はるもせゝやゝに伝めくるゝ御

中弁ゝ方ゝ紙尺ゝふはまてゝ

四十七首

四月二を

五

花の名

春はゝの廿日ゝまりに御門ゝんてんの桜の名

ゝいゝりきされ春宮の御つゝ御ゝみさに

みゝ御ゝのゝうゝ月ゝいてゝみゝれて弓のさゝ御ゝ

ゝ月ゝけゝゝふゝ尺ゝ人ゝゝかんゝゝゝゝゝたゝとゝゝ

詩

ゝゝゝゝゝ源氏の君春ゝいゝゝんゝゝ御ゝ

のゝ月ゝ御ゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝ

ゝちゝ

大ゝゝゝ花のゝゝ紙尺ゝまゝゝ

春ゝゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝ

御ゝゝゝゝ枝をゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月夜に君をもいでおもさいうさ付ておれまつ

けい

世をさくらの花をとすれあり行あめ

月のゆくをえそり侍つく

いつかてもうのんかて世をとそ、えいう大ん之の六

の君なり春之（女御こまいをんとのほく人う、

面しいのすをみさの世くに六の花えんあう源

氏の物つくりかをくゆうまた

我中の物うくれ多めうい

たちん

行うい侍ふ君ゑまこうん

まうをうをいてなくれくみそらえいくさ紅をこう

ゆいて、この人世まする、ん天のみとれ戸めく、

けい

あつさゆくいるさ乃ふ侍ふうれ

なのん〜月のうもやえんゆうと

れくあくいのるいえしのえるうん

女

さうんいるかうさう侍をたゆくさうの

月のさうをうい侍ふいまうやて

いくいてくうえ春をうれなんう行くさまのうん

望八首

六　あつい

本と天うう四つあを春宮こゆうきうんくう

きてんの女御少公のまくくは四代乃さうれきうひ

ゆ、さの虎をうて大きさんの春とに六の

[illegible]
きこえあつけりあくと大わらこ六条のうちとを
乃ぶくこと[illegible]
伊也の舞[illegible]
のぶあり如これ[illegible]
[illegible]
[illegible]

おかせて、夜いりぬさせ申すれば、ほとゝぎす来なきいく
源氏の中まうのぼるまゝに、ほのかなるやさのうぐひす
ほのかに聞えたるを、すゞろに人目もとゝめぬ宮のうち
をゝ、ながめふかくて

かけをふみ川のほとりなれば

月のうゝ程なるに、ほとゝぎすとこゑ〳〵川かぜのこゝろすゞしくなきあはせたるこゑ〳〵、もののあはれをかたらひ出でたるほどのけはひ、
さのみ心をかるべきさまにもあらず、ものしたまへば、
うちとけたまへるけはひ、
なつかしうらうたげなり、
ひけをとるべきあまたの人にあり、見まほしきにほこ
ろびぬべきあたりにこそ、源氏の御心のとまるべきふし
ゝなどあるにつけて、ものの思ひのまさるに、
かゝるけしきをもあらはさじとつゝむ
に、ものもおぼえずなりぬるを、
ゆゑ〳〵しくもてなしたまへるかな、
とのみ、
人のうらみをかこちたまへば、
ことわりなりとのみ、
ものしたまへるに、
ほとゝぎすのこゑ、
ほのかにもてはやしたまへるを、
ものはかなくもあるかな、
とのたまへば

源氏物語

けふはやひとのうきさをあてはゆく
神のゆるされ給はぬ

源氏物語

けんぶつ

かきつけるふでのあとにてあれ
やそうら人とうらあてはを
うらやましけれ

源氏物語

人のうらなはさはうら紙
是はひとさとの上てのうらをいとあてはく
うらにはひとあうくなるうらけふのかさうてあてはく
さうれいおうそいさるうらをいとあてはく
足やをあいて和わるしゆへあてはて名付うら
所をうらて伝へうらへうらんをみるひさうるふ
うら後おうそいはまうゆゆうゆうゆうゆ
けんのふをうら大のひわ君をのけるまうら
ひうへいのうするふれうをうたしゆいまく
やうて君をうゆ松うるへいうの所へ足やをあいさ

すこしはのちのゆへ(ゆゑ)をいふ。こゝの心のうつくしきこゝろぬ、
あかるゝよ、身をすてゝいけやうんとうけをと
うやとも云ひわかるゝ

身をすてゝいけやうふうんみすゝち

かうなる物をさうなるとうら

といふ事の心源氏にてこゝろをとゝのへ
ものゝ中にも大なるのひとゝ者いつくるゝ
人にみすまいらせて、うつくしきとうれしくふうやと
思へるもうつくしけなる神なるこゝろ
神なるこゝろにうつくしきとうれしくふうやと

わらんたこの身つくそうれ

物はづ

あさみうわんをおうさんれ
身をそうんまて云ひこゝろを
沖さんいはゝ物をおうりやはふうそのはけ
さあうぶうやこゝろいく、世分つゝ源氏をよい
よせくるこゝろ

いちえん

うけさうまいそうふみうる我五式
ひとゝいうそんよ下うえのつま
あるふ物のけあうまれて
われいうれおさたくうれ
はけ初公式はけうはうんとうあらいく
ふうさすうふうれのそうとあをれ〳〵のうこいて、

ゆそう法氏のゆらのさと　夕さりの大雨とけいをふ
あるたけのる君のうそめちもたゝあるくまいろ
てくゆさゆしのをやれあけくのんる者さえのまい
ぬけさるまかれまいあつしのかさけいをふあうち
れくゆ海大文のゆるけうさ中くいてるるゝ八月
なるのあるたさふおさるなるいゆるゆ山ゆんゝ
いみゝをゆかゝゆくふそのゝなるゝまくく

けん　のかるるけうのいう秋とまるのも
なてくくまれのるのれなるれ
法氏ゝたくゝるゆのそゝそまるふをゆるゝた
うをすゝふるゆゝゆゝゆくゆまれさくまゝ

あ女君いゝるくをそのるゆいまゝゆゝ杉かをも
あれなる

けん　かゝうあれいるみすをみ衣あさそれと
うみをそ神をゝうちとなゝくるゆ今のさゝあゆるゝ
ゆゝをあをゆゆ

ゆゝ　ゆゝもあれ杉たいるのゆるくき
まゆい衣をしるるはるも
ゝいゝゝかのゆるゝなゝいゆゆゆゝ杉ゝあゝかゝた
まるあゝうけゝゝれあれあいのゝるゝゝと菊
のゆれゝゝゝる杉ゝ分くゝけゝかゝそいよくゆゆを
おゝゆゆゝゝゝいのゆゝなるゆゆゝ来ゝみるゝた

[illegible]

人の世にあれば世をも病まれる

おくり神にぞ祈りいこそゆき　前に世をもそり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]れて屋まとかてて

[illegible]れい物のかの乃あるくのあるなそ

[illegible]

源氏

[illegible]

物おもふ[illegible]

物おもふ[illegible]

[illegible]

[illegible]

まてとうふさいうまの人をたしかめんとしうさこ
ゆゑいまはすてる世わやはまをうふいてをはうしそ
えんをうふあさいみのこれうれをいを出まあうをと
るしかくかてこ条院におはしてこ一夜いたしうふ古
とのこうくみの日ようもしたりいわ君とごうら
るんつさかくそあうをいま一緒さうをふ祝いくの
おうをいう年はさうをたう祝いまさぶといて
おいをい祝いおくぶも祝い人をいふ十月
いみの日ようけんしいもしたり姫君をふの祝し
みうこうをれ世の人のこうあれ中をまた
すうれ中にひさもしたいはまう

けん

あやかりてつてけうふ祝をおさ祝
さまうふうけうまう乃衣紋
ゆわうがぶ世のかをもう人をあわにうなく
このこきこうんと世いわ君をこ屏をおかうう
又乃夜いいのこもうちいさいをうる式尺のうして源氏
えうをおうてい乃ろをうてこのこうちいかく牧
くわはあそうたこの夜さうさいをよごうしいいぶく
茂日ならぶこのうをれうこうたうけるいて
いうやこわうれいうをいうわこうさて祝のこう
いうはうこいうすきふうう源氏こううひうん
うそもあんかこのうを祝おこうちいこうよぶよ

いとをもしろくあるいのこれあるを日ぐれいとをもしろ
くもあるかなといひなり源氏はこんりんとかくれたるうち
に侍をこなれ大事はそのこいなりさてあるを夜ふ
けてかのうちかたをもてまいりてはなりを
かまいりたるゆゑいの物といふ物の入
たるかこの紙にてさぶらふなこそはめ
のうちにもかくしてけるはなをさしを
こいたれば大きこなる衣のもちのあるはあたそ
ぬあるかとしてかくて行いうらんをいう
ちいてもちうちにもわかれをおかしうふるふる花の
まちをの彩をあけをく

衣をもてをくしたんけくうちなくに
やいとのもちの姫君はいかにいとみくきこえ
をうちたれは源さんあるか
みうちをるかうくれおのをもてれ
をれは源さてをもてをさ花る
やいとのいのうちそもゆゑ正月朝日きいのゆゑ
源氏をもをのへまうちのはをあををいをもの
をくをんをうけかかけらはをさ花と女はは衣ををを
はけへる

源氏

あまをこ年けあるををいとの衣
ををていをまをこ花をゆる四花をる

大会

あるしき事もいとゝ立るものゝ
うりあるゝの事なるとゝ（ゝたいの人のまゝて
をこの会あるゝ）

以上世宗首　　川竹会

七　さう紙

所之いとゝゝんの司より、紙の巻入をうり出れい
ゝゝゝんの次第より、野乃文れうゝいかゝ、さう紙の
ゝけうゝて、い物紙いゝ事也、只今ゝ紙ゝあるゝ
てゝうゝまいゝゝふゝけゝと、源氏の巻ゝゝを
あるゝゝいゝゝ紙巻紙ゝいゝんゝ、打ゝいゝゝく、
巻の巻ゝゝく入ゝゝ源氏ゝゝふゝうゝあれてく
ゝうなまゝんゝ紙あゝれゝ、人きゝとゝけなくゝ

おゝ打ゝて、ゝ巻ゝ、ゝ巻ゝ、ゝ月七日乃
初なゝゝけゝ巻ゝをゝけゝゝゝゝ物ゝ、
秋のゝゝれ打ゝてゝあゝゝ巻をかゝゝ
しれ初ゝ、打風すゝく次おゝゝゝゝ小ゝ
ゝゝ紙大ゝゝゝゝ巻ゝ巻ゝなゝ
ゝゝ木ゝゝ井ゝゝふゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝかゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をまつる紙みその内へはいくかつゝゐをきて
わくこれをいうきをもこゝにはりにそれいとのまゝに
ちゝやうれ神のいうをうつゝ
門方
大こうやへのうしろ人ゆくさふ
のいつゝ方のみすう　それをいつゝえて
みやうしん
神うさいたゝれしの板もなれたる紙
いうはほうゝ神ふしぶさうさて
おさうちるさうせうちるさうもうれたる
けん
おしたこうあらわせすいはうれたの
かゝ紙をうつゝとうてこれをおき
りくはうふちうさう
月はの四物うあうれ神かゝひさこえすゝこゝ
ときこゝうへ月をへゆうやあうれなる紙

ちうあうく伊勢へ下のゝ事をうゝみさいくうゝ第お
うゝのうゝ事うれ四わうもいひゆんうれし
源氏もみたようゝうれうゝ女うゝ海ゝ　のひ
うゝあいわ四うれをみうれをけるとゝ
けん
あうたゝ物うれをいはも寝けゝ紙
こゝ世にたゝ私のうゝ
世ゝうゝいふあひなうれ板しゝを四れうう
うゝうれい四返ゝ
みやうしん
大方の私の四れうれうきう
神ふなれをへうゝ歌へのれし
あけうるうふゆうゝいゝうゝうゝまよ

法氏より所司代の出方へ申入ゆゑ、
こそまちうきて
いかなる風はみ神を動かすは
けん〜
あらぬ世乃中紙をいれ
たい所〜大ん〜所司代を
よくつくるを所と係
氏の中とこれなり也
ものいふ女ろくさふかせ世ぬ
玉は神をこそ
所司代
ものさうこそ紙まつや申さん
ろくさう事のけん〜の
つをこそ申すべ
こそんこそう
同九月十六日より所司代を角ちかへいてがたく門乃
沸こそ出あり、所司乃ろ紙同事也さはの御大
四〜こそいうまこそ申西沸こそ出ぬ
ゆ〜沸門乃ろ紙ゆかしいな
それ神をけ〜いうけしをこの花
ふ乃内こそものをうれ〜
沸門大こそんこ出ぬいろしく、ひるまの桐をうち申
うく、いみ〜くあれて、ものたれさせうしいうを所司
十四ものを院の代をうを出ぬを、結をふとく、
八ものにそけうけ所人ろ後とも、神ろ足所を、
物見ろはもまいうゆかし
ろふうろ　こそぬは　足んふうさう、うんとうはた
ろくこそ、くこそ出ろいて、かうしいんうふこ後へお
まろうこそ二条の院ろこそ
こそ所名

源氏

ゆうすゝけてそ行とも すう川
やうせのすみて 神なれ やゆ なれやうう
雲ふかれいろの日やれのあれさう

すう川やせのうみをぬまつゝを
行方まくらゆすいれ ぢん
源氏いてあれよ おうう あうくう さうをいてを
うつうれかった

けん
紅なる紅なゆん 比叡
あ坂をきうるつてを
をいのをいゆていふ 仏ほとゝ みうう ん院の門
をまうるやをいくこの
のひを れるくおりゆをい

御門も紅葉あり 四ゆいうんあは 春宮伝 ほを
又源氏の大将をは 天下のゆゝうをみかり
て 大ふの事ゝ ゝてを れゝのをひあるをを れ
くゝうん 春宮 もおゝて ゆゝ ゝんとて 十一月朝日
かゝれををゝう 世の中あ ゝゝて けさ
ゝ人ばかり 為ほかれ 中将源氏をの四ゝうの
門ゆゝて すれゝるゆをけさなう 大ささをのゝう
まゝをゝうゝゆゝん世をは いうをうすゝんとゝかう
ゝう 四 罪ゝ日まをい 女御 さ衣 足やを 院ゝ
あつまうゝいを ゝをまい ゝれゆをみうゝうひ
ゝ ゝをゝをの世をれい 大ゝこのをゝをゝうゆる比ゝう

しるしい物のかさり紙いとけちそいるの色さをいつり
御おのゑえれ下はちるる紙

いやそふのまま

かけいろ〻をはるる〻松やまもてうん

そてはちゆく年のくれり姫　松をいんびして松やう
まだいんをまる紙ある
しきうもこゆまるまる

けん〻

月之波ふいけのかゝれさやけ紙て

見るれ行う年をみぬそうれ〻さ　けいる紙ひてもつの
かゝしてけんまう
うれそうれ〻さ

年ゝ〻く岩井の水をうるうちら

ゝふ

見て人うけれあせもゆうれ

ちゆく

ゝるる月夜いゆ〻ならのゝ〻いくさてひさ井門乃
ゆゝさゝいうけまてもゝ源氏をのゝ思ひまゝゆゝさて
たりいゝ風もゆゝ人うゝ人ゝあいんまゝ古ゝをあるも

院のかゝ宮をうゝこをあれそゝおそるゝきせを源氏
もれかゝゆゝけゝれゝあるゆゝふゝなるゆゝさうゝ姿乃
斎院ゝあんの御ゝてゝゝれゝれうまいふゝうゝおゝさうゝの姫君
いはゝさゝいゝ多ゝ源氏ゝいゝ思ゝ紙ゝかゝをゝなゝわゝしゝを
神ゝ〻ゝくゝかゝゝ宮ゝ乃御ゝ月夜の内結のゝ
はは御門ゝゝあんれゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝはゝしゝみ
れゝまれひまふ源氏ゝたいゝんゝゝまゝいゝゝのゝう
きてんのゝそゝのゝはゝるゝふゝ出あひまゝうゝゝ
ゝゝゝ

をきてをこす

四位

ものゝかなしく神ぬれぬるそう郎

あくとれはこゝろにつきてもいとそうえをつけられたる人をあくふるゝこゝろ

あけさせぬ内世いかゝてすせゝや

侍従

しるのあくへきなれはそもなく

人のあくさくなわ事なるなくこゝろ

ひたすらもをもかなしかるをさてをこゝろみのすゝめ

月のうへ人の中わゝいかゝ人のうらいまはなん

ゝ

花つかの中ゝいかゝ行ゝ行くもうくる世の中ぬ

ゝ

ゝ

ゝ

いたくのあまりてふくらみ、ふくれ、ぬかるみ、ふくれ、
こもりたるもいとはしたなくなりぬ。
まつ、九月十日あまりのころ、れいのうんどうゐんへ、はつて
あくるまでもあかしあかしもめでたさて、秋の
のかれくるるにみまいていたちもはれまいぬ。
こうろうのかいのはおくつにおくるる
ほくそ天台六十巻をよみきつてうちいて、
うんきをいとをてきたりてはしたくたま
ひうるにおこるひいでうるこうつらひ乃
初ん仏ちのしやうやうちのをく
おこるひきふとうしかをやはされを
世をこれにそはれみたの
岩のうけうらゆきかくてん
とらつ寺のにたうにんくまてかさをは
うるれ月をふこうるいのこれうすきもんち折
ちうと菊のたるんをあるふをほてかくかを
をあつきれあくかるいるみいこの世もつま
くかをとはの世をこをのもけるうはをわちき
なれうはのはれてかりをうくしれされ乃と
乃はつまくふうるはてはくこはやうかく
けん
あさらこの病れゆうに天紙おさて
よをれあくをきうの仏かれ

月かげはまつそらもなく更かゆる
あらしはかぜにかるさくふ（はるのこころふのたいさおのこたいさ）
吹こす風もちりぬるしい加茂の斎院（はるこそ
まつるる法本ゆのかくかくかくかくふ
けん
かけまくもかしこけれとそのこころ
秋をまちゆる夕ことにふる（秋をまちかゆるといふこころはつゆやあさつゆすゝしくもんもかゆ
ふるこころいふるこころ也）
返てもゆめのうちはゆふ
斎院
そのこころやいつたあ〜ゆふこれ
つるをそ思てんゆふ（法氏のこゝろはるこゝろけそ
せむ〜ゆふるこゝろ
けん〜ものこゝろ也）
とあるなら出る日ふ法氏のもとにもこゝ
て法氏のこゝろゆふこゝろ
ふ法氏のこゝろ
中宮乃法氏のこゝろ
かゝる法氏のこゝろ
しるしらるまつ
き法氏のこゝ
そ乃事きこゝ
法氏のこゝ
中宮乃法氏
月をあらるこゝ
乃折ふ法氏のこゝ
て十五夜のよ中宮より法氏のこゝ
法氏
そのへよりやるこゝ
月をそふふ

月をみて夜の秋をうらはるきりぎすの声

中宮に侍る人しもとあかしの浦の月秋乃

源氏へ

あかつきの嵐に堪へぬ秋の夕べ

あかつきの嵐に堪へぬ秋の夕べ

ぬぎ捨てし衣の色に

あいぎせて思ひ出でぬ

なつかしの秋はぬ

第の事あるにはあらぬ

いまるく源氏のゆるし

ゆるしむまうでぬ人々

ひつぎ

ひつぎ

そこ三ケの大事ぬ

つまとりけつ

紅の

おうぎ

けつ

十二月ゆ中宮ゆ

うきをうつ

戸いうをいて

まりて

月のうしを井をうけ給てこそ

けん

世のやしなひやはてん

大そのうれつるていなんとも

けん

いつこのうれをかきろへさ

正月一日引人おれ馬をうり引いて人を乗る

源氏ものがたり

かくれかくれあはのうみをのるに

けん

まんまくれうれ物をうり

御さはりをあらいの乃高てよれ

あるを世のなかをふをさうこの

けん

さらにおすこれうるかさうる

年れをうれ先も世の中をうりまはして乃中将まいりて、いんうれをいうなる

いんの地をちいされ石をおくうれてうるうん

みくいあはうれ光のかこれをさるふなら中将

源氏おそかりをいぬ中将乃まけをれ日をの

りのちをいをれいうされて春林の花をみられ

さうをうをもをうやみれ物をさいふさい

をうをうこれうあをはう物をさゆう花のをうたふを

ちうふ源氏の君へかをうけまいる。はをうをおけて

あをしのうをいをはうかれおりいをたをれい

乃の君　うれをうあけをうけをうをんを花う

おもはぬ君のあいをそみる　俤を変なたくへてあり

あるときて、清うまけとうとうとて

けん　何ものとかおさえ難い夏の雨

ちかけまゝ　ふりかゝれく　俄ふりとなりひてやてきるとも

おもうへまう物をとて、らうつをきう山ものを

をとうをいてちいさうへ

以上卅二首　門前二を

相つふうはうさまて十帖内にあり

前数合百四十六首

引前卅一を

紙数　七拾九枚

正保四年　二月吉日　三冊の内